
String-Loop.

実アラズ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

String-Loop.

【Nコード】

N8623A

【作者名】

実アラズ

【あらすじ】

大昔の作品。書いた本人はファンタジー寄りSFのつもりだったらしいです。

(古すぎるので評価受付は終了しています。)

第一話 追われる獣

木の皮がはぜる様な音。或いは金属同士がぶつかりあう音だろうか。人影は月夜を走り抜けた。銀色の輝きが時折、その人物の姿を闇に浮かび上がらせる。次の一瞬は、湖の上に。

柔らかそうな、それでいて芯のあるしなやかな焦茶の髪に、揺れる瞳は熟れた巨峰の水々しい青。肌は骨董の硝子の如く透け、唇はふつくらとした花卉で、それら全てが星の様に光っている。少なくとも、それを目にした者には星に見えたに違いない。体付きは華奢で、髪は肩口付近で遊んでいる。水上を滑る足は軽やかに羽毛の如く滴を弾いていく。一瞬では少年か少女かの判断は付きかねるが、人影はもう既がない。水面に波紋だけが残った。



銀杏の繋ぐ並木道に、濡れた痕が破線になって続いている。それを辿る先は並木道から大分外れた路地裏で、一匹の獣が昼間中だった。黒に白いブチがある猫。飼い猫とも捨て猫ともつかない痩せていても艶めく毛並、首輪は無し。相当グッスリお休みな様で、人間の気配が近付いているにも関わらず一向に目を覚まさない。

——鈴の音がする。

猫は体制をそのままに、耳だけを神経質そうに動かした。静かに、痙攣の様に。どうやら水の痕は猫の足跡だったらしく、起き上がった陰も濡れていた。

「…?」

猫はまるで人間の様に、小首を傾げる仕草をした。ザラザラと地面が削れる摩擦音。あれは鈴じゃない、路地を通る自転車だ……。眼に安堵の色を浮かべ、猫は再び横になった。今は休まなければ。

「フギャっ！」

瞼が閉じきらんとした正にその瞬間、肺に———というか胴体に強烈な圧迫を感じ猫は悲鳴をあげた。

（今、踏んだの誰）

猫は踏ん付けた本人の足から視線を上になぞらした。寝起きの据わった眼が怒りで半開きになり、それはさながら威嚇するチンピラの様だ。

「あ、ゴメンね。痛かった?」

「ええそれはもう」

踏ん付けた足の主は猫を抱き上げ、目線の高さを同じにしてから謝った。微妙に発音が標準と異なる様だ。対する猫は不機嫌そのもので、あからさまに怒りを表明する。

「あ、猫じゃなくて獣人か。失礼しました…?」

謝る最中、語尾が裏返った。俄かに少年の顔が曇ってゆく——その間にも、不穏な気配は強くなっていた。

「1時間もすりゃあ追い付かれそうだよ。それにホラ」

「鈴の音」

「うん。ド不味い」

ダブルパンチにカウンター用意しとらんしね、と付け足して少年は猫：獣人を抱えた。獣人も抵抗をみせない。お互い追われる身である事に、何となくではあるが両者とも気付いていた。



それは未来の世界。街の景観は現代とさほど変わらないが、中身は大きく変化していた。安定していた国勢が揺るがされたのは、今から百数年前の事。日本海域で巨大な地震が起きた——あろう事かそれは、地震予知システムセンターのレーダー網を全て掻いくぐった。史上希に見る大津波が東アジア、ことに日本全土を激襲し、各国は多大な被害を被った。しかし、津波がもたらしたのは被害だけではなく。地震の原因となった海底火山の噴火の際、海底深層部が大きくえぐれ、結果それはひとつの鉱脈を掘り起こした。その鉱脈というのが特殊なモノで、水銀と同様に常温では液体をしている。火山の熱で気体になった特殊金属は海から大気へと進出した。そして空気中で冷やされ液体となり大地に降り注ぎ、全世界で最初の、しかし最後の“特殊鋼雨季”が到来したのである。

雨季が去った時、日本を中心に東アジアでは“奇系児”が発生した。姿形は普通の人間だが、彼等は通常らしからぬ能力を持っていた。国々は彼等を保護した。



駄目だ吐きそう。獣人の猫は、霞む頭でそう考えた。寧ろ頭は前後左右に大揺れで、霞んでるところではなかったが。少年は走らない。走りはしないが、屋根や塀を転々とバツタ並に跳びまわっていた。黒糖パンの色をした髪が揺れ、単発的に繰り返される息の音とリズムを共有する。動き過ぎて景色がわからないが、通り抜けた色は沢山ある。風を受けて毛並が瞬いた。

ようやく停止した頃には幾つかの街を後にしていた。古ぼけた遊具が廃墟の様に立ち並ぶ、かなり年季の入った公園の、一際古いドーム型の遊具の中で二人は一息付いた。穴から夕陽が差し込み、夜がひしひしと迫ってくるのを感じる。

「ねえ獣人さん、人に戻ってみて」

「何で？」

「見てみたいから」

単純な理由に喉の奥がむず痒くなった。けれど少年が輝く笑顔で頼むので、獣人は承諾した。ゆっくり、壁を使って立ち上がる。ほんの一瞬の出来事だけれど、景色は変わった。

「∴初めまして」

鉄色の髪の少女が呟く様に言った。少年の目の前にいるのはもう猫ではなくて、ふたつの翡翠を持つ薄絹の様な人間だった。

↓Next.

第二話 似た者同士

夜と同化していく服、浮き出る白さ、糸の様に繊細な瞼。少女に似合う形容詞が見当たらなくて、少年は息を止めた。眼差しが湖面の様に揺らぐ。

紺色のワンピースは袖がなく、少女の肌が月を被って真珠に輝き、細いのがよくわかる。黒に白ブチの耳はそのまま、秋の土手を覆うススキを思わせる睫毛に飾られた翡翠は間違はなく自分を映す。先日渡った湖よりも深く澄んでいるのに、何処か淋しげで真っ直ぐだった。

「あ……えっと僕、夕葉」

「羽与。それと——」

一度そこで言葉を切って、羽与と名乗った少女は地面に腰を下ろした。落ち着いて見えるけれど耳が小刻みに震えている。

「正しく言うと、“普通の” 獣人じゃないわ。もう気付いてると思うけど」

頷いた。それについては自分も同等だったから。もしかしたら、それ以上かもしれない。

「言葉の鍵、ねえ」

例えば『林檎』であるとか、『解除』であるとか、あるひとつの言葉が発信源になる。元々は人間の作った種族なのだから、一瞬で形態変化という訳にはいかない。まず第一にそれが常識だった。つ

まり今、少年・夕葉の前に居るこの猫少女は人間の常識外にある。

「よく似た状況って事だわ。……僕等」

言って夕葉は右の袖を捲った。乳白色のシャツから露になる、服との狭間を失いかける程に白い二の腕に、ひとつの痣。

「見せなくても奇系だって事はわかってるわよ。あれだけ跳び撥ねてくれればね」

「ゴメン。でもそうじゃなくて」

羽与の辛辣な言葉に、夕葉は少なからず凹んだ様だった。続けながら掌を反す。手首に浮かび上がるのは黒ずんだ緑。縁取られた刻印だろうか。

「何……それ」

「特定奇系って知っとる？」

グルグルと渦巻いて見える、何か惹き付けて止まない様な、酷く美しい紋様だった。それはどうあっても自然の——例えば先程、夕葉の見せた奇系を示す痣であるとか、そういったモノのひとつとは思えなかった。第一、それは歪みを持たない印標。

「羽与が“知られざる獣人”っていうんなら、僕は“知られざる奇系児”って事」

「一般民衆から見たらそうね……一度“マスター”に聞いた事があるけど、本当にいたなんて」

マスター。妙に冷たい響きを持って放たれた言葉は、恐らく羽与の心をそのまま映したからだろう。

「でも詳しくは知らない。きちんと説明して頂戴」

もう此処まできて隠す必要すらなくなった。ただ夜の真ん中に、闇を裂いてひとつの時間が共有されるのみ。静かに少年の口を借りて後ろ側の真実が語られていく。

始まりはその昔、日本から特殊鋼雨季が去って二年半が経過してようやく、奇系児の存在が認められた。東アジア各国は会談を繰り返した末彼等の保護を決定した。

普通の国民と同じ生活が送れる様に教育機関を設ける事、全て人権を認める事、安全に条約が締結するに至る。但し特定奇系判断の下りた奇系児は例外として。

「その能力が危険、尚且つ教育不可能。そういう奇系児は特籍を与えられず消去……此処までは常識の範囲内ね」

「まあそういう事」

奇系検査は毎年五月に満二歳を対象に行われる。一次で痣の有無を確認し、二次で能力値・種別・安全性を測定後は施設、つまり奇系児教育機関へ送られる。この時、奇系には特種戸籍が与えられる。また奇系の両親は国から一生涯生活保障を受けられ、奇系児に対する親権の一切を失う。

「内ほんの一握り。社会から消して、裏で教育されんの」

「つまり夕葉は存在しない筈の人間て事？」

「そ。特定奇系は洗脳を受けて軍用兵器んならざるを得んの。ほいだもんで僕は逃げてきた」

夕葉が言い終わるのとはほぼ同時に羽与は再び形態を猫に移した。勿論、言葉の鍵は要らない。

「本当、よく似た状況ね。強いて違いを挙げるとしたら、私は貴方の様に自然じゃない」

最後の言葉に首を傾げ、夕葉は羽与を抱き上げた。夏が終わりかけているのを肌で感じたから。

「意味は明日考えるでさ、今日は寝よ」

星が三度瞬いた時、孔だらけのドームから小さな寝息がふたつ重なった。ただ少年の腕の中で、黒猫はまどろみの中思っていた。この出逢いが、何を変えるのだろうか。



シルバーの曲線に添えられた、男性のものらしい骨張った指は、焦れったそうに拍を刻んでいた。机の下で白髪混じりの顎髭が揺れる。彼の前には全身黒衣の男が、その長身を折って跪く。

「良いな？傷ひとつ付けずに連れ帰れ」

「了解しました」

黒衣の男は立ち上がり、一礼した。そして扉を背にして真っ直ぐ廊下の闇に溶け込んだ。ゆっくり靴音が小さくなってゆく。傷ひとつ付けず、顎髭の男はそう言った。けれど彼は知っている——既に“彼女”の体はボロボロの筈だと。否、だからこそ傷付けずにと命じたのだ。

「グリーンドール、か」

安心は出来まいな……言葉に合わせて顎髭が揺れた。

…↓next

第三話 知られざる……

今朝はまた随分冷え込んだ。地面に置いた手は朝露にまみれ、泥で薄灰色じみていた。羽与は膝の上に居た為濡れてはなかったが、膝の主である夕葉はそういう訳にもいかず、寧ろ自分のくしゃみで眼が覚めた。

「羽与…」

返事は帰って来ない。その代わり規則的な寝息が空気を伝わって、少年の鼓膜を揺らす。夕葉は羽与を抱えたまま遊具から顔だけ出した。太陽の位置が、まだ明け方であると告げる。

「羽与、起きりん」

猫をつつくとくすぐったそうに体をよじった。そういえば、獣人の生活サイクルは人間と同じなのだろうか。もし猫のサイクルと同じであれば、彼女はまだまだ眠り続ける事になる。それちよつと困るなあ、と少年は思っていた。そんな時、羽与に異変が起こった。

「ん……」

「うわっ！」

何の前触れもなく、猫の形態は少女に変化した。突然の重みに夕葉は危うく彼女を落としてしまうところで、間一髪その体を浮かせた。空気に、である。

「お早よ……っ?!」

欠伸をしかけた少女は言葉を失った。大きめな眼をパチクリさせて、地面と自身との間を見る。そこに空間があると確認した後、視線は夕葉に移った。いや、夕葉の手に。荷重に耐えている為、微かに震えながら少し奇妙な曲がり方をしている。

「お……ろして」

「ちよっ、ちよっと待った」

今“離し”たら地面に激突は免れない。羽与もそれに気付き形態を猫に変えた。それから黙って音を立てずに着地して、ようやく地面の上に立ったのだった。



緑のランプが数個だけ天井から提げられた薄暗い回廊を、一人の男が歩いていく。背が高い為にランプを避けながら、ひとつの扉の前で立ち止まった。彼は錆に覆われた取っ手を、黒衣から出した血の気を全くと言って良い程感じさせないまるで通夜に使う蠟燭の様な青白い手で掴む。削れる耳障りな音と蓄積された埃の煙に顔を――見えないが多分、しかめた様に見えた。

「“スーラン”」

彼の対峙している植木鉢は巨大だった。大人でもゆうに三人は入れるだろう。その中に土はなく、深緑色の蔦の塊が蠢めいている。男はソレを掴み出そうとした。か細い声で呻き縮こまる蔦。

否、鳶は泣いていた。



夕葉と羽与の二人、もとい一人と一匹は公園を後にした。とは言え行く当てはなかったので、とりあえず人目のつかない裏路地に戻った。

「どうするの？」

「正直、考えとらんかった」

大体考える必要も余りなかった。捕まりさえしなければ、何処だって良かった。最悪、海外でも構わなかった。

破滅的な考え方をするなら、生まれる必要もなかっただろう。詰めてゆけば生きる必要も。

「本当にどうしようかね」

死に場所を探しに行こうか、位に考えた。けれど今は一人じゃないという点で、少し難しくなった。羽与を巻き添えにしたくないのもある。

けれど一番大きいのは、ただ一瞬、もう少し生きたいと思っってしまったから。

「理由を探しに行こうか」

これもひとつの、終わりへの旅。



人工的に造られた森の奥に、ひっそりとその建物はあった。壮厳にすら思える建ちっぷりからして言えば、“ひっそり”とした佇まいは似合わない。鋼鉄で（しかも多くは特殊鋼で）覆われた外壁は高く分厚い。それは能力を持つ者達を遮断する。警備は幾重にも及び、ほぼ脱出は不可能である。国の最新設備が凝縮され尽し、恐らく『日本恒国国立研究所』に匹敵出来る程嚴重なのだ。

「だと言うのに、一体これはどういう事なんだ！　よりによって最大戦力、最高能力、最重要国家機密を！」

『落ち着いて下さいませ。貴方が猛ったところでアレが戻っては来ませんわ』

「ユイリン、まだ見つからないのお？　やっぱ国研の新しいパルス借りれば？」

『ワタクシの問題ではありません。それと国研はそれどころでは無さそうです』

男性と少年、そして機械的な声の女性は会話をしながら、それぞれ画面から眼を離さずにいた。液晶の進化型であるクリスタルディスプレイには、何やら異様に細かいグラフが表示されている。

「季里？　御前、何を隠してる」

「隠してる訳じゃ無いし。こっちも逃げたんだよ、アニ……」

季里と呼ばれた少年は、言いかけたところで言葉を切った。ディスプレイ上に赤い文字が点滅している。

「君の仕事は無駄じゃなかったよユイリン。どうやらブロンズメールが見つけてくれた様だから」

季里は笑った。嘲る様に。果たしてそれは、誰に向けられた憐れみだったのだろうか。男性は立ち上がってユイリンを『オフ』にした。静かに停止する彼女を作業服を来た数人が運ぶ。後ろで扉の閉じる電子音を聞きながら、男性は煙草を取り出した。

「ブロンズメールは信用出来るのか」

「まあね」

薄紫の煙がゆっくり部屋を満たしていった。

↓next

第四話 理由を探す

低くうねる様な警告音を背中で聞いた。

予期はしていた。

長くは続かない事を、少しでも長くこのままでいられたらと。浅はかな望みは絶望の始まりか、それとも。

「羽与……？」

嘆きとよく似た色の鳶が、少女の華奢な脚に絡み付いていた。転んだ時と同じ様な体勢で羽与は動かない。否、動けない。とどまるのに精一杯だった。鳶は細さに似合わず強い力で彼女を捕えていた。

「スー、ラン……っ！」

鳶の先に広がる闇に向かって、羽与は呟いた。



すっかり白くなった部屋に顔をしかめながら、季里はディスプレイの電源を切った。

「じゃあボクは爺の所行くね」

胸ポケットから小さな機械を取り出し、ボタンを二回押して再びしまう。帰宅連絡をした様だ。恐らく直ぐに迎えの空飛舟フライングシップが来るだろう。

季里が去った後の誰もいない部屋で、男性は煙草を灰皿に擦り付

けた。ディスプレイの文字は何の感情も抱かず、ただ事実を告げて煙に隠れる。

「自分の死すら知らされないとはな」

世の中には、知らない方が良い事なんて幾等でもあるのだろう。けれどそうしたひとつを目の当たりにして、男性は憐れみを覚えた。予想外に笑えなかった。久し振りに、可哀想という感情を覚えた。



逃れようと必死だった。捕獲しようと新たな鳶が幾本と伸びてくる。夕葉は鳶を払い除けたが、しつこいわ多いわできりがない。

「ちっ」

珍しく舌打ちをして、少年は両手を地面に付けた。僅かな脈動。

「そこか。出てきたらどうだん」

彼の睨む先は鳶の生えている部分と逆だった。路の舗装の狭間が崩れていく。メリメリと音を立て、巨大な子葉が何かを来るんで現れた。車サイズの单子葉類といったところだろうか。子葉の根本には、髭根に混ざって人間がいる。

膨らみが綻び、子葉にくるまれたモノが姿を見せた。全身を黒衣で包んだ長身の人間。顔をも隠している。男性だろう。

「羽与を離せよ。命が惜しいんなら」

「ほう。しかし御前如きでは俺に傷を負わせる事も出来ないだろう」

挑発なのか自信過剰なのか、男は言って低く笑った。

すると夕葉の眼が怒りで鋭くなった。地面が舗装ごと引き裂け、下地が隆起して、岩が投げナイフの様に男を襲う。男は動かない。

「奇系である事位は予想していた」

金属音が響き、岩は皆落下した。夕葉は少し驚いたが、今度は手刀を作り空を裂く。切目から摩擦で炎が生まれ、鞭の様な形になって再び男を襲った。

「スーラン！」

何故か男は子葉を蹴って後ろに下がった。子葉を盾にし、その陰に隠れる。炎の鞭は止まった。根が動いた。



赤いダイオードランタンが揺れる。ランプが全て点灯し、充填完了を告げた。ユイリンはゆっくりと起き上がる。全身に熱っぽさが残り、耳が上手く機能しない。もう慣れた。

「不比等…様？」

主人の名を呼ぶが、誰もいない。いつもパルス充填の時は来てい

たのに。

ユイリンは立ち上がり不平等の部屋へ向かった。廊下は薄暗い。早く仕事に戻らなければ。

『……えないな』

『所詮は中国製、仕方なからう』

部屋の扉の前でユイリンは足を止めた。声からして不平等とその弟だろう。

『処分するか』

『そうだな。…そろそろ充填完了じゃないか？』

『これで最後の充填だな』

その後ユイリンは無意識に充填ポッドの中に戻っていた。瞳を閉じ、じっとしていた。

不思議と泣けなかった。



くすんだ薄桃の長い髪に、灯の様に揺れる瞳。肌は白い。けれど、殆んどが蔦や根に覆われてよく見えない。

根は女性だった。

「植物……人間？」

見慣れないソレに夕葉は思わず息をのんだ。何という事か、日本の科学技術はそこまで発展していたのだ。否、“スーラン”という名が彼女のものなら、中国だろう。

獣人はまだ解る。哺乳類同士ならまだ。鳥人も作られたらしいと聞いた。魚だろうがトカゲだろうが、動物という点で納得がいく。

「御前は何も知らない。羽与の事も」

巨花は泣いていた。

羽与を蔦で包み、果実に収めて、泣いた。

「ごめんなさい……ごめんなさい……！」

少年は動けなかった。まるで蔦に捕われた様に。

植物の女性を殺める事など特定奇系である彼には容易いが、良心がそうさせなかった。黒衣の男は再び子葉に包まれ、巨大な植物は大地に沈んでいく。

「羽与の……事……」

確かに僕は何も知らん。何も聞いとらんかった。聞く前に彼女は連れてかれた。

羽与は何？

彼女は人間。猫。それで？

どうして追われた？何故逃げてきた？何処から？どうやって？

知らんね。

「西……大通りの下……」

夕葉は大地に手を当てた。行方を辿る為に。
彼等を追わなくては。

「――国研？」

理由を探しに。

第五話 飼い猫

薄汚れた世界。大国の裏側、ありきたりな腐敗……

「おかえり、私の猫」

微笑んでいた。けれど彼の眼は決して笑わなかった。



少女は冷たい鉄の床に横たわっていた。白ブチの黒い耳が痙攣している。眼は渴き、喉は今にも張り付きそうだ。めくれたスカートから覗く太股は、その白百合の花弁の様な肌が赤く滲んでいた。よく見ると幾つものミミズ腫れが被っている。しかもそれらは全て特大サイズのミミズだった。

「逃げたりなど。悪い仔だ」

どうして。

こんな男が、私の主。

「ごめ……なさい……マスター……」

男——相楽は手にしていた黒い革の鞭をしまい、羽与の側に行った。首輪から伸びる鎖を掴み少女を起こす。それから猫にする様に首筋を撫でた。

「良い仔にするんだよ」

優しく微笑み髪を撫でる。“お仕置き”の後は優しい主になるのだ。

「御前は休ませねばならないね」

言葉に合わせて顎髭が揺れた。初老に差し掛かった主は、とてもじゃないが国で力を持つ様には見えない。しかし恒国の中心とも噂される国研の所長、総理大臣にだって顔が利くだろう。実際、相楽は今回の羽与の脱走で、もしもの時は恒国軍を動かそうとすら考えていた。

余談だが日本恒国は憲法を改正し、国の保安と称して空海軍を保持している。陸軍はそのうち持ち始めるであろう。



散弾銃でもぶっ放してるんじゃないかと思う位の連続した爆音が、裏路地で出来る限り地味に響いていた。勿論どうあっても派手ではある。一応は威嚇なのだが地面は既に穴だらけだった。

「わわわわっ！」

思いつきり当てる気満々な銃撃を、文字通り目にも止まらぬ速さで避ける少年が一人。故に地面の穴は増える一方である。果たしてこの調子で羽与を助けられるか怪しくなってきた。

「どうしょっかな。方向的に絶対追いつめられるっていうか」

言いながら夕葉は真っ直ぐ行き止まりへ走っていく。弾の雨は止まず、大地を破壊している。夕葉が壁にぶつかって初めて静かになった。

だが静寂も長くはなかった。

一瞬の内に少年の姿は掻き消え、更には上空で撃ちまくっていた小型の飛翔艇コンバットウイングのエンジンに不備が発生した。小型であった為近くの公園に不時着出来たが、偶発とは思えなかった——と飛翔艇のパイロットは語る。

勿論偶発ではない。夕葉が炎の鞭をエンジン部分に突っ込ませたからである。

「空飛べなくて良かった。さて」

鞭を突っ込ませた後不時着ギリギリまで機体に張り付いていた少年は、ヒラリと身軽に着地した。煤と埃を払ってその場を後にし、国研へ向かう。既に辺りは暗くなっていた。



羽与が目覚めるとベッドに寝かされていた。真新しいシーツは洗い立ての香りを漂わせている。何か肌寒いと思ったら、服を着ていなかった。恐らく血が付いたんで洗ったんだろう。普通の少女であれば全裸で目覚めた時点で混乱しただろうが、羽与は黙って形態を猫に変えた。慣れていたのだ。

丁度ドアが重音を鳴らして開いた。

「おはよーはあちゃん」

彼は猫を持ち上げ鼻先をつついた。一方猫は小さく欠伸をした。

「爺がね、服洗っておくって。……まさか今全裸？」

「セクハラで訴えるわよ」

少年は笑った。猫も少し。羽与にそんな権利はない事位よく解っている。

「ま、別にボクは何かしようなんて思わないけどね。寧ろ爺が何かしてるんじゃない？」

「残念ながら何もされてないとは言えないわね」

猫は何となく苦笑した。余り笑い事ではなかったが、気にしたところで何にもならない。それから少年に噛みついてやった。勿論甘噛み程度に。

ある意味二人、もとい一人と一匹は友達だった。少なくとも夕葉に出逢う前までは、唯一自分を人間の様に見てくれる人物だった。まあスーランは別として。

多分これからも、唯一であり続けるのだろう——夕葉にはもう会う事もないから。

「ねえ季里、黒衣の男を知ってる？」

「ああ、ブロンズメールの事でしょ。知ってるよ」



痛い
痛い
痛い

「……手荒な真似をして済まなかった」

暗がりのくすんだ薄桃を撫でる手に、生氣は感じられない。冷たい、鉄の様な手。それなのに酷く優しく感じられた。

この“人”は本当は臆病なのに、弱さをさらけ出す事を禁じている。自ら己を封じてしまった。

だから私は、痛いの。

「可哀想なのは貴方でしょう……？」

瞼にそつと唇を寄せて、溜めた涙を飲み込んだ。体温なんて知らないから、そぐわなくても構わないから。

せめて貴方の優しさを受ける、鉢になりたい。



不比等は驚愕した。握られた拳はワナワナと震え、眼は見開いたまま乾燥している。

「アレが……国研に？」

有り得ない、そんな事——眩き、椅子に倒れ込む様に座る。ユイリンが駆け寄った。

理由が全くわからない。何故？

「……今日は御休み下さい。私が今から国研に行ッて参ります」

「ああ頼む。疲れた。化け物の考える事なんか理解してたまるか！机を壊しそうな勢いで叩いて言った。相当イライラしている様だ。というか、それは恐れともとれた。

ユイリンは黙って部屋を後にした。少しパルスが減っていた。

↓next

第六話 真ん中

産まれ堕ちた事の、絶望。

貴方は理解してくれた。

けれど僕を愛してはくれなかった。

「世界を壊しとるのは御前だ」

だから、サヨウナラ。

朱にまみれた、言の音を教えてくれたニンゲン。



朝露に濡れた頬を擦る。そう、泣いた訳じゃない。きっと。

懐かしい。

とは言え数日前の話だけれど、でも今では遠い昔みたいだ。痛かったな。ちくり、と針が突き刺さる様な、そういう痛みがあった。

言葉を忘れていない。決して。不可能だから。死と破壊と絶望をもたらず、ひとつの運命だから――

「助けるまで、守れるまで泣かん」

貴方の憎んだ力で。



ピ、と短い電子音の後赤いランプが付いた。

『パスワード ヲ ドウゾ』

「s n ・ o w w ・ h i t e」

『パスワード カクニン カンリヨウ シマシタ』

ドアがひとつ開いた。するともうひとつ部屋があって——というか小さなスペースに、機械で埋められた壁があった。緩やかな動きで伸びてきたコードはユイリンの目前で止まる。

『パーソナルチェック カイシ』

薄紫の光がコードの先端から溢れ、虹彩を捉えた。

データはハブ（中枢）コンピュータ『S』に送られる。本来なら。しかし今回はサブコンピュータ『K』に送られた。

視界が開けると、少年が居る。

「ご苦労様、ユイリン」



文字通り、摩天楼。空の天辺を擦る位の高さを誇る、国の中心である施設『日本恒国国立研究所』略して国研はあった。その巨大さ

たるや、屋上から彼方の自由の女神が見えるだろう。果たして何階建てなのか、最早肉眼では数えられない。

移動手段としてフライシップ（前々回も出たけど空飛舟ね）が使われているらしく、上空を巨大な鳥型の機械が飛び回っている。

「……羽与どうやって逃げ出せたのかね」

思わず眩く。もう感服の域だ。流石は動物。

「そいじゃ行こっか」

堂々と正面から入ってみる。入っ……

扉が見当たらず入れなかったので裏手に回った。巨大な建物せいで息を切らしつつ、反対側へ。多分だけど反対側へ。

案の定裏口らしき扉はない。果たして何処から出入りしているんだ研究員（数万人）。



季里の案内でユイリンは国研最上階の私室へ連れられた。とは言え何やら機械が積まれた部屋だったが。

ユイリンはソファに腰掛けた。

「不比等さんの秘書も大変だね。紅茶とコーヒーどっちにする？」

「お構い無く。それで、単刀直入に申し上げます」

「あ、別にボク偉くないから敬語使わなくて良いよ」

「そういう訳にはいきませんわ」

丁度そこに紅茶が運ばれてきた。薄く湯気がもたげ、ミルクの入った小瓶とシュガーポットを添えて。

「で、特定奇系が此処に来るって？」

「確実ではありませんが、方角から可能性は高いそうです」

「うん……やっぱり眠鷹呼ぶよ」

季里は青い壁に整然と並ぶボタンの中の、黒いものを押した。それからソファに座り直すと、紅茶にミルクを注ぐ。

暫くするとユイリンの背後——ドア側で金属音がした。

「失礼致します」

全身を黒衣に包んだ男性が入ってきた。顔はやはり覆われている。彼『眠鷹』は季里に一礼し、ユイリンに眼を向けた（様に見えた）。

「特奇収容所の不比等さんの秘書。挨拶して」

「……ブロンズメールの眠鷹です」

「遼魚淋です」

何の気なしに握手をする。眠鷹の手は冷たく、滑らかだった。季里に言われて彼が顔の覆いを外すと薄青い表情が露となった。鼻筋

の通った綺麗な顔立ちではあったが、血の気を感じさせない。

「でね、脱走奇系の一覧見て」

「これは一般の奇系収容所のもですね」

机はガラス張りの部分が実はクリスタルディスプレイで、タッチパネルも搭載してある。タッチパネルとは指で触れた部分にドットが付加されるシステムである。まあ現代にもあるけれど、当然ながら性能が違う。

「関東地方は殆んど回収済み。残りは……自殺、もしくは回収時に誤って死傷」

「……？」

「つまり『表向きには』脱走奇系は報告されてない」

それが如何程の確率かはわからない。ただ、有り得る。

「国家機密同士が出逢ったという事ですか」

「まあそうだね。眠鷹の言う、はあちゃん……爺の猫といた子の特徴と」

「こちらの情報とを照らし合わせるンですね」

頷き、季里はディスプレイの電源を切った。こうして見れば極普通の机。しかし先の特殊鋼雨季で鋼に侵された木ではあった。

「容姿は……髪は焦茶で、瞳は淡い群青。身長は160前で、細身でした」

眠鷹は所々切って、思い出しながら言う。

「見られた保有奇能は炎鞭、岩矢、その他に名称不明の能力」

「……有難う御座いました。間違いなく彼ですわ。ですが何故、貴方はアニマロイドを連れ帰られたのでしょうか？」

一瞬、静か。沈黙というより、無言に近い。

ユイリンの言葉に眠鷹は整った顔を少々ひそめた。とはいっても余り変わらない。彼は元々、表情のないタイプだった。

「彼の能力でしたら周りを破壊せず綺麗に貴方だけ殺す事も出来ます。それとも貴方は不死身なのでしょうか？」

「いいえ。私とて死にます」

「それでは……」

ユイリンの声音は、とても、不思議そうだった。

「情けをかけたのでしょうか」

思わず小首を傾げた眠鷹の脳裏には、少年が佇む。情けをかける程、その横顔は冷たくなかった。

↓next

第六話 真ん中（後書き）

読んで下さり誠に有難う御座います。

先日『名前が読めない』という御意見を頂きましたので、とりあえず読みを表示してみます（苦笑）

夕葉↓ユウハ

羽与↓ハヨ

季里↓キサト

遼 魚淋↓リアオ ユイリン

眠鷹↓ネムタカ

不比等↓フヒト

相楽↓サガラ

因みにスーランは『糸蘭』と書きます。
お粗末様でした（汗）

今後も宜しくお願い致します…

月海 樗紹。

第七話 国研 1

後ろ側で、誰かが悪態をつく。
身震いしながら見上げてやっとな、僕は正体を知る。

それが出口か入り口なのか誰も知らない。



黙ったままの眠鷹を季里が小突いた。ユイリンは紅茶を一口飲むと静かにカップを置く。

「では不比等様に伝えておきますか？」

「何を？ 特定奇系がこっち来る事確定？ やめた方が良いでしょう」

脳梗塞でも起こしかねないよ、と季里は冗談混じりに言った。そうして紅茶を再び注ぐ。そこでふと眠鷹が口を開いた。

「確定ではないでしょう……その、まだ」

「いや確定だよ。来る」

「何故ですか？」

「あー、『来てる』が正しいかな。南側滑走路に侵入者有り……って連絡入ってる」

机をディスプレイに変換したところ、赤い文字が点滅していた。
加えて『奇系反応有り』だそうだ。

「避難勧告か。まあ此処は大丈夫だけどね。眠鷹はSⅡS—Lab
の方頼むよ」

「わかりました。羽与は相良様の私室ですのであちらに任せて宜しいですね」

「ん。じゃユイリンが来てる事も伝えてね」

一礼し眠鷹は出ていった。



風が冷たい。手が痛い。
っていうか落ちそう。

「ちえ、折角あそこまで登っただけに」

夕葉は国研の壁に張り付いていた。いや、登ったのに落とされ、
しがみ付いていた。

そう少年は入り口が全てフライシップの発着場だと気付き、多少
奇系能力を使いながら十八階まで登ったのだ。そして滑走路に入っ
た瞬間警備システムによって落とされた訳だ。

「落ちたら死ぬなあ……あはは笑えん」

空を飛べたら——なんて

収容所には空を飛べる子がいた。空気に自分を浮かべるのだと。今だけは羨ましい能力だと思える。

どうして今だけかという、空を飛べる子は爆弾や薬品をバラ蒔く為に教育されていたから。確かその子は物に火を付けられた。多分女の子だった。

「再チャレンジしよ」

夕葉は再び登っていく。幸い何階も落とされた訳ではなかったから、すぐ十八階に着いた。今度は手だけ滑走路に置く。しばらくもしない内に警備システムが滑走路の端からまで上下左右ある巨大な鉄壁を押し出して来た。

炎鞭が壁を叩く。繰り返し何度も、何度も、何度も。

それは一種の我慢大会だった。とりあえず勝利なのか最終的に壁が歪み、隙間から夕葉は侵入を試みる。

「成功っ」と

嗚呼、後ろ側で。

誰かが悪態をついた。

誰だい？



冷たい冷たい。空気が突き刺さる。私は一人ぼっち。
闇から逃げたい……

「う……ん」

ボンヤリ歪んだ視界。羽与は邪魔っけな前髪を顔から退けた。どうも寝ている間に、無意識に形態を変えてしまいうらしい。最近というか数日前の、最後に夕葉と過ごした朝から。

嫌な夢というのは目覚めを悪くする。例えば内容を覚えてなくても、それが恐怖と嫌悪に渦巻いていた事はわかる。何となくビジョンが浮かぶ。けれど酷く曖昧で、本質がない——脱け殻の様に。

ノックの音。

「入って良いかしら」

「どうぞ」

ノックをする人物は限られていた。つまりスーランだけだった。

「何か用？」

「……その、謝りたくて」

「何を？言っとくけど貴女を責めるつもりはないから」

「でも……」

ざわざわ、ひとつずつ別な動きをする葉。身体中から伸びる蔦、

髪に混ざって揺れる花卉、足元を覆う髭根。紛れもなく植物であり、またその朽葉色の瞳は紛れもなく人間。

スーランは申し訳なさそうにうつ向いた。

「もう良いの。それより訊きたいんだけど」

「う、うん」

「あの眠鷹っていうブロンズメールよ。『何と』混ざってるの?」



滑らかな曲線の机を規則正しいリズムで――癖なのだろうか、叩いていた。爪が哭くのを楽しむ様に。

勿論彼の眼に映る文字は『警備システム異常』と『南側通路に奇系反応有り』。後ろでドアが空気の抜ける音を立てた。所員は矢継ぎ早に、その上でんでバラバラに状況を報告していく。

「所長っ！ 全通路から奇系反応が消えました！」

「……どういう事だ？ センサーの故障かそれとも……奇系を隠す能力でも出来たか？」

「センサーは正常です！」

所員の返答に相良は舌打ちをした。とても忌々しげに。

「季里はどうしている？」

「『坊ちゃん』でしたらSⅡK-Labです。SⅡS-Labはブロンズメールがブロッケード作業を行っています」

「わかった。通線が切れたりはないな？　よし、所員は皆解明を急ぐ様に。これは国研の存続にも関わる問題だ」

「それとブロンズメールを介して『坊ちゃん』より伝言です。……秘書が来ている、と」

どういう意味でしょうかと所員は首を傾げた。けれど相楽はそんな彼を他所に、素早く通信準備を始めた。

「所員は皆、と言っただろう。早く行け」

「は、はい」

電子音が、こだまする。高い音もそうでないのも、長い音もそうでないのも、連続する音もそうでないのも。所員は退室した。

相楽は言い様の無い不安を感じていた。それは微かに羽与の脱走した時を上回り、かつ正体不明の、孤独感にも似た感覚。寧ろ同等か？

「季里……御前は何を……？」

確かに足音を立てて近付く、何時しか膨張しきってしまった喪失への恐怖だった。

↓next

第八話 国研 2 (前書き)

引き続き国研編をお送りします。

第八話 国研 2

少しの鉄と、青銅。

自身が硬いのか脆いのか自分でもわからない

「あの人は金属で出来てるの」

彼女は優し過ぎる

「本当はとても優しい人なの」

いつか壊してしまいそうで、恐ろしくて、でも暖かなのだ。



随分と前から思ってたけど、どうして飽きないのかしら。そんな風に羽与は呟いた。スーランは黙っていた。

「どうしてやたら人間と別なモノを混ぜたがるの？ 貴女わかる？」

「いいえ、自分が造られた事すら謎なもの」

「そうね。でも貴女は花でしょ？ 花になりたい願望位あったかも知れないわよね」

猫の言葉に花卉を持った女性は口を開いたが、電子音に遮られた。断続する、黄色い音。

二人もとい一輪と一匹が腰掛けたベッドの脇に点滅するボタンがある。羽与は猫であるため代わりにスーランが押した。

『SⅡS—Lab並びに各種シンセシス、警戒せよ』

「あら、どうしたのかしら」

『ザー、ブツ……所長命令である。侵入者は奇系児の疑いがあるが奇系センサー及び警備システムに頼ってはならない。慎重にせよ。なお戦闘不可のシンセシスはSⅡS—Labに待避する様に』

それは相楽の声だったが、何処か慌てた雰囲気だった。羽与は首を傾げる。

「まさか」

「あの男の子かしら。貴女と一緒にいた」

「……やっぱりそう？」

「大当たたりィ」

二人もとい一輪と一匹は固まった。そして二人もとい一輪と一匹は同時に顔を頭上に向けた。それからドア。床。

そして二人もとい一輪と一匹が見たのは、壁からプクリと浮き出た少年の顔だった。

「ゆっ……ゆゆゆゆゆ夕葉?!」

「ひっ……」

猫は思わず花に抱き付いてしまっている。花は壁から逃げる様に後退り、その足元に葉を散らしていた。

「あはは。ビックリしたらあ、忍法壁抜けだに」

「ビックリどころじゃないわよ！　　っていか何でいるのよ」

もう、会えないと思ってた。

どうして希望を持たせる様な真似をするのだろう。

羽与は全身から力が抜けるのを感じた。ゆるゆる、引き擦るみたいに、落ちていく。けれど形態を変えそうになったので、ハッとして猫を維持した。

今は裸だ。

「まだ終わらせる気はないもんで。で、来るの来んの？」

「あ……えっと」

羽与はスーランに何やら耳打ちした。そしてスーランはそそくさと部屋を後にしたが、すぐに戻って来た——手に羽与のワンピースを携えて。それを羽与に手渡し、床からノロノロと子葉を伸ばした。

「服着させてあげて」

「……着とらんかったんだ？」

スーランと夕葉は互いに苦笑した。彼女の背後では巨大な子葉がモゾモゾと揺れている。羽与は中で服を着ている様だ。

「そーいやぁお姉さんの名前は？ 僕は夕葉」

「スーランです。糸に蘭で」

「中国の人？」

「うーん、『製作者』は中国人ですけど私には国籍ないので何とも。卵と精子の提供は多分中国です」

「そっか。ユイリンとは別みたいだね」

「ユイリン？」

「特定奇系収容所長の秘書。中国製のパルスボディースだったわ多分」

そうなんですか、とスーランが興味深げに相槌を打つ。丁度羽与が子葉から出てきた。形態は人間だ。

「パルスって何？」

どうやら中で話を聞いていたらしい。

「さぁ知らんだぁ。訊いた事ないで……多分電気っぽい物質じゃないかね。動力な訳だし」

少年は顔だけで小首を傾げていた。よく考えたら奇怪な光景であ

る。羽与は出ろと言ったが、夕葉によればこれ以上出るとセンサーに引っ掛かるという。

「ところでさっき放送しとったじゃん。シンセシスって何？」

「私やスーランとか研究所の『作品』の事よ。って呑気に話してる場合？」

「焦らん焦らん。今晚は壁の中で過ごすよ」

少年は朗らかに笑みを浮かべた。



ユイリンと季里はそのままSⅡK-Labで待機していた。因みにSⅡS-Labは『サガラ・シークレット・ラボ』つまり相楽の極秘研究室を意味し、SⅡK-Labは『スペシャル・キサト・ラボ』と季里の特別研究室を意味する。

「何か暇だねユイリン」

「そうですね。随分静かですけどどうなったンでしょう」

あれから新着の情報はない。季里は既にソファの上で寝転んでいる。

空になったティーポットを視界の隅に置いて、ユイリンは小さく欠伸を漏らした。

「でも帰れなくて少し嬉しいです。帰ッたら改造される予定なので」

「え、何で？」

「中国製は一月毎にパルス充填をしなくてはならないんです。不比等様から聞きましたが、日本製は常にパルスが送られていて充填の必要がないンでしょう？　ですから改造して同じ様になさると」

充填ポッドお気に入りなんですけどね、と続ける。

「……日本製？」

空気と視線が変わった。季里の言葉からは普段の人懐っこさが抜け、垂れ下がった眼尻が引きつる。

ユイリンはハッとして自らの口元に手をやった。しまった、とでも言う様に。

「日本でパルスボディース製作はされてない筈だよ？　どういう事？　それとも特奇収容所にそんな技術提供したっけか？」

「いえ、その……本当に御存知ないのですか？」

おずおずと女性は告げる。

真実は時折、爆弾以上の破壊力を見せる事があると、昔誰か言っていた――



時を同じくして、特定奇系収容所。略して特奇収とも呼ばれる。

所長を務める不比等の横に腰掛けるのは、一人の男性であった。二人の横顔には似通ったものを感じる。それもその筈、男性は不比等の実弟であり副所長。名を入鹿イルカという。

「兄さん……本気なのか？」

「何がだ」

「あの女を妻にするのかって言ってるんだ。あれはスパイだぞ？」

「そんな事はない。不穏な動きがあれば私だって気付くよ」

入鹿はむくれていた。あんなの人間じゃないと呟いて。

「兄さんは騙されてる」

「だからそういう言い方はよせ。そう言って実は御前が妻にしたいんじゃないだろうな」

「そんな訳ないじゃないか。俺は人間を妻にするんだ」

苦笑しながら不比等は画面を眺めた。

そういえばユイリンが帰って来ないな……と、ボンヤリ思った。



しばらくしてスーランは寝室へ向かった。寝室というのはあの巨大な植木鉢の事である。長い廊下を渡って緑のランプに照らされな

がら、ふと羽与の事を考えた。

あの娘はいずれ戻って来なくなるだろう。臆病な自分と違って、何度でも逃げるだろう。そしてきっと、あの少年も彼女に似ているのだ。

「……眠鷹さん」

入り口で佇む人影に呼び掛ける。彼は顔に覆いをつけてはいなかった。

端正な微笑み。優しい人。

寧ろ——だからか、自分を連れて逃げたりなどしないだろう。

「スーラン」

青銅を含んだ男性の手が花を愛でた。花は金属にその蔭を伸ばす。まるで冷たく固い鋼を、温めて柔らかくする様に。

↓next

第九話 孫（前書き）

最近、夕葉と羽与の出番が減ってます……（苦笑）

第九話 孫

「貴方は、……か？」

違う。違う。

「それでは、……か？」

そう。ボクの名前は……



「貴方自身が日本製なんです」

ユイリンの言葉を受け、少年は愕然とした。震える。嘘だ、嘘だ、嘘だ……と。体から拒絶を示している。

日本では製作されていない筈で、例えば秘密裏で行われたって自分の耳に入らない訳がなくて。

それなのに、自分自身がそれとも気付かず。

何も知らされず何も疑わず、自分は相楽の孫なのだとは無条件に信じていた。

じゃあ『季里』って誰なんだ？



特殊鋼採掘の際、ある気体が生じる。『ヘプタ素』という。そのヘプタ素を電気分解する事によって生まれる脈動体。それがパルスであった。

そしてすぐ、韓国——大韓民主主義国でパルスの動力化が可能であると発覚。様々な実験を重ね、生物をパルスで制御出来る様になった。そういう生物をパルスボディースという。但しある利点が、同時に問題を含んでいた。パルスは死んだ生物をも制御可能なのだ。だからパルスボディースは一般化されなかった。

流石に死者を生き返らせるのは出来なかったから。一般化すると、誰かが必ず失った家族をパルスボディースにしてしまう。道徳的理念がそれを許さない。宗教感は様々だけれど、確かに人間の踏み入ってはならない領域だ。

中国や韓国でも一般化はされていないが、国の中枢機関で秘書等として何人か使われている。



「滑稽だ」

季里は上擦った声で言った。

「よく出来てるよ本当。本人だって気付かない位だ！　滑稽だろう？　自分が人間だなんて信じてたんだ！」

何処か自棄にも見える。ユイリンに向かって、愚かだろう？と
嗤った。自嘲する様に。

けれどユイリンは眼を逸らさなかった。

「人間です。貴方も、私も、きっと」

ただ命の単位が違うだけ——そういう希望が彼女にはあった。



巨大な植木鉢の中で、一人の青銅が花を愛でている。

少し狭い位が丁度良い。

それは青い人形に蔦が這ってしまった様にも、男性が女性を抱き
締めている様にも見えた。どちらが錯覚であるとも言えない。

「眠鷹さん、また……羽与を連れ戻せと言われたら、どうするの？」

「マスターの命令は絶対だろう」

虫を誘う、香り。

「しかし私には不可能だ。少年はいずれ真実を知る。そして既に術
を持っている」

深く息を吸い込んで瞑目した。どうなるか、わからない。少年が
特定奇系児である以上、収容所に回収される可能性もある。

スーランの気持ちはよくわかった。二人を自由にしたいのだろう。
優しい人だから。それに自分もそう思う。

眠鷹は考えた。これからどうなるかは皆、夕葉の背に掛っている。だから予想なんかしていなかった。彼を含めて誰も。この後の惨事を、そして結末を。



「爺は駄目だ。不比等さんなら知ってるかな」

机がディスプレイに変換された。通信中、という表示。
接続完了、反映シマス。

『季里か。丁度良かった。ユイリンはそっちにいるんだろう?』

『うん。彼女から興味深い事を聞いたんで、詳しく教えてくれる?
ボクがパルスボディースだって事』

『な……』

ディスプレイに映る不比等はただ驚きを浮かべていた。季里はもう嗤っていない。寧ろ怒りを浮かべている位に見えた。
画像が僅かにぶれる。

『まさかユイリンから漏れるとはな……我が国の第二国家機密なのだが』

『そんなゴタクはどうだって良い。ボクは——季里って何者なんだ?
? この体は「誰なんだ」?』

『「季里」なんて人間は実在しない』

その時、季里もユイリンも沈黙していた。

『体は相楽氏の御子息、「神楽（カグラ）」のものだ。21年前に事故で亡くなった。相楽氏は体を保存して、18年前に君を完成させた』

おかしいと思わなかったのか？

18年間、どうして一度も疑わなかった？

自分が成長しない事

自分が一度死んだ事

おかしいじゃないか。

「ちょッと季里様……！？」

数分後、一人の所員が様子を見にきた。しかし季里の姿はない。来ていたらしい『秘書』とかいう謎の客もまた、去っていた。その所員はすぐに相楽に知らせに走る。所長は青ざめていた――。



妖怪塗り壁よろしく少年が顔を出す。白い壁と同化しそうな位、

彼は色白だ。

「何かまた騒がしいら」

「そうね。でも放送はないみたい……貴方何かした？」

「や、寝てたで」

「よくその状態で寝られるわね」

少女は浅く溜め息をついた。丁度その時、側頭部の柔らかな耳がピクピクと何かしら反応した。少年が小さく声を上げる。少女は半開きの唇に指をあて、静止を促し、耳を澄ませた。

『——が……って』

『気付いたらしいな、……の』

廊下に行く所員の会話だった。

『“坊ちゃん”が——って』

『そりゃ……だから』

聞こえない。イライラして耳を上下させる少女に、少年が顔で招いた。

こっち来て。と。

言う通りにした少女を、少年は引っ張り込んだ。効果音を付けるならズルリと。

「ちよっ……？ 入れた」

「自分が入っとる時は他の人も入れる事が出来まーす」

塗り壁が二匹になった。

「此処からなら聞こえるら？」

少女は頷き、再び耳を澄ませた。狩をする時のネコ科の動物に似ている。猫だから当たり前だが。

壁の中は、接合剤のゴムっぽい臭いがする。

少年はそっと、さりげなく、少女の手に触れた。温かい。少し冷たい。

「夕葉……」

「あ、え？」

少女は心底驚いた表情をしていた。

「大変な事になったわ。季里が、マスターの孫だか息子だかがいなくなっただけ」

果たして幸か、それとも不幸か、それは一瞬では判断しかねた。けれど上手く利用出来れば幸だ。

「予定変更かね。じゃあ行こ、羽与」

↓next

第十話 逃亡と逃亡と願望

全て壊してしまえ

衝動に理由なんていらないのだから

壊してしまえ。



日本恒国国立研究所、略して国研は騒然としていた。

シンセシス達にも瞬く間に『坊ちゃん』失踪が伝わり、所員達は慌ただしく彼等を抑えていた。混乱に乗じて脱走を謀るシンセシスがいたのだ。

「季里が通ったのは“人間用の”通路だ！ 早く搜索ドローンを出せ！」

「ですが所長、ドローン格納庫が破壊されていまして……復旧とドローンのチェックは」

「くっ……パルス輸送機から逆探知しろ！」

「はい！」

所員は一礼した。相楽は下唇を噛み締め、ディスプレイを睨む。季里も輸送機からの逆探知が可能な事位は知っているだろうし、何か小細工をしてあるかも知れない。流石に輸送機自体の破壊はし

ないとは思うが。

それは自殺行為だ。

どうしてこんな事になったんだ。

生きて欲しかっただけなのに。

60も半ばの老人はうわ言の様に呟いた。



それはフライングシップ発着口付近の、壁。

白と銀の舗装を施した、何の変哲も無い壁であった。そんな壁が実は硬度レベル金剛石級だとか、リキッド加工済みだとか、とりあえずそれは置いておく。

「で、どうやって降りる気？」

「そこじゃんね。壁伝いでも良いけどさ、流石に疲れるし」

外側に顔を出すと——はたから見れば建物の外壁に顔が浮かんだ訳だが——街が一望出来る。空に鳥は少ない。カラスだろうか、黒っぽい影。

十八階分の高さとなれば住宅街が板チョコみたいに見えた。緑は破線になって街を縫い付けている。

淡々とした空の中腹で、それらはつまらない光景だった。

「早くしないとバレるわよ。いつそ個別に動かない？」

「そりゃ駄目だよ。ちよつと手荒にいくしかないね、全く……猫！」

羽与は軽く夕葉を睨んで形態を猫に変えた。そして少年の肩に飛び乗る。

ぐらり、と視界が弾んだ。

粘土かゲルの様に足場が沈み、ずるずると重力に任せて下へ。壁の舗装部分はこれで良い。

『手荒にいく』のは此処からだ。

十階位まで降りたところ、舗装から鉄骨組に変わる部分に着いた。壁は壁でも密が薄い為、沈み降りるのは出来ない。

「じゃ、歯あ食い縛りんよ……つと」

つまり落ちるしかない。

約二十七メートル、落下。

「！」

人間と猫の体重の差で、羽与より速く夕葉が落ちていく。二十七メートルはそう長くなさそうなのに、二人もとい一人と一匹の間は拡がっていった。そのうち土台に近付いてきて、夕葉は左手を地面へ伸ばす。

一か八か？

「くっ！」

ギリギリ自分を浮かせる事に成功。以前、羽与を浮かせた時より負荷は大きい。

「私は何処に着地するのよ！」

「僕の背中！」

会話終了直後、背中に軽く衝撃がきた。

大丈夫だ良かった——と少年が安堵しかけた瞬間、大丈夫じゃなくなつた。鈍い音を響かせ地面にこんにちは。ぐきん、と嫌な音がプラスされた。

「あ痛つたああ！」

思わず夕葉は声を上げた。唯一大丈夫だったのは、地面にぶつかった衝撃が警備システムまで届かなかった事だった。



街に隙間は余りなかった。元々のタウンデザインが密度の高いものだったからだ。

無駄は省く。それは近代社会で当たり前な思想だった。

街を四角く囲む林すら、人工に過ぎない。それでも緑は緑であり、自然は自然。そう主張したいのか、大地は殆んど苔に覆われている。

「どうするつもり……？」

彼女は訊いた。その声は何処か機械的だった。実際、彼女の体は多分、どんな劣悪な環境でも三ヶ月は持つ。

「自殺……いや、自壊しようかな」

少年は答えた。その瞳は何処か樂觀的だった。

手の平は三粒の球を弄ぶ。卵の形だけれど、大きさは幼子の握り拳程度しかない。灰色の小さな機械、それも破壊の為の試作である。

季里が持ち出したそれは彼自身が造ろうとしていた兵器のミニチュアで、本体の設計図は逃亡の際に爆破した。

「ごめんよユイリン。巻き込みたくなかったんだ」

「でも……」

「どのみちボクは死ぬ。絶対に失敗はしない。だから終わったら君は帰って」

ふう、と息を吐いて

「出来れば改造されずに、生きてくれ」

少年——もう体は三十過ぎだけれど——は、笑った。それは自分への嘲笑であり、今出来る唯一の手向けだった。

ユイリンは俯いた。

その肩が揺れていた事も、地面が色を変えた事も、季里は気付いていた。ただ見つめるしか出来なかったけれど、それでも……

「人形じゃなくて人魚なのか」

“淋しい魚”が、顔を上げる。パルスを含んだ涙は真珠色をしていた。



土と埃と、むせながら夕葉は立ち上がる。脚に擦り傷と、打撲が
出来た。

しかし激痛は違う部位から脳へ電波を放っている。

「羽とお……」

「どうしたの？何かあった？」

「腕、折れた」

猫は肩から飛び降りた。少年は半泣きみたいな表情で座り込む。

「だってホラ痛いし四角に腫れてるし動かないし」

「わかったわかった。そういうトコで弱いんだから、全く……」

羽与は形態を人間に変えた。何を思ったか鉄筋に手を伸ばし、
そして。

豪快にも両手で曲げる様に折ってしまった。

（羽与……という馬鹿力なのさ）

夕葉は思わず心中で突っ込んだ。少女は気にせずワンピースの
カートを裂き、それを包帯替わりに彼の腕に巻く。折った鉄筋は添
え木の替わりにした。

「重っ！ 鉄筋は重いつて」

「他に無いでしょ。後で木にすれば良いわ」

少年は苦く笑った。

それは丁度、もう一人の少年が笑ったのと同じ時刻だった。



断片的な電子音が空間を満たす。

ディスプレイは淡々と事実を伝え、そして点滅する。

「兄さん、もう止めろ」

苦々しく男性は言い放った。彼の瞳は霜が降りた様に冷ややかで、静かで、そして憎悪すらある。

彼は——入鹿は、兄を見下ろす。椅子に座ったまま愕然として、言葉も発せられない状態の不比等を。

そして電気を失ったディスプレイには、反転して映る入鹿の顔。醜く歓喜を浮かべた自身を見た。

↓next

第十話 逃亡と逃亡と願望（後書き）

ユイリンの漢字表記は『魚淋』です。

？と思った人多数ですよ（苦笑）

第十一話 爆発に歓声を

それが自分の『産まれた』場所
自分を『創った』場所で

自分にとっては忌まわしい場所であると、少女自身が一番よく知っている。

一種の呪縛。



白い金属が縁取る二重線の真ん中を、酷く綺麗な水が流れていた。
形ばかりの用途なき川は、どちらかと言えば水路に近い。

住宅街は閑散としている。

「幾つか訊きたいんだけど良い？」

「……どしたん急に。別に良いけど」

少女と少年は水路の淵を歩く。宛てなどなく、ただ出来るだけ都
心を離れようと。

せめてものの救いは多分、二人の体にチップや小型電導機器の類が
埋め込まれていなかった事だろう。お陰でまだ追手は来ていない。

「何処の方言なの？　っていうか何で標準語じゃないの」

「あー、これ収容所の担当からうつった。因みに愛知県……だと思

うけどが」

良い人だったなあ、なんて呟く。
どうして過去形なの、と訊く。

「僕みたいのが逃げたんだよ？ 勿論あの人はさ、引き留めようとすんの」

——御前が

「抵抗したら死んじゃったわ。……や、殺したの方が正しいかね」

——御前が世界を狂わせた。全部、御前が壊しただわ……

少年は瞑目した。開いた。寸分の瞬きでさえ、あの人の記憶をフラッシュバックさせる。笑う顔も怒る顔も悲しむ顔も、最期に見せた血まみれの憎しみも。

「優しい人だとは思ったし好きだった。けどさ、特定奇系の担当なん楽しくはないでしょ。戦争の為に育てるんだし……」

そうあれは、脅えきったけれど怒りを孕んだ眼。今にも泣き出しそうな眼。

みるみる色を失ってゆく——

「貴方、人を殺す能力があるのよね」

「まあだから特定奇系なんだけど」

「……使わないの？」

「残念ながら威力の制御が難しいもんでね。疲れるし。使いたくないつつうのが本音」

水路はサラサラと静寂を運ぶ。川沿いに等間隔で植わった杉も、その木陰にびっしりと生えた苔も、転がる石くれですら自然であればある程に人工的に思えた。

此処はまだ都会と呼ばれる範囲内にギリギリ含まれている。

大地は洗淨され、それを侵した特殊鋼はあちこちで利用されているらしい。きっと田舎や地方はまだ侵された土壌に人が住んでいる。その分、奇系児も多いだろう。

「羽与だって似た様なもんじゃない？」

少年——夕葉は緩い笑い方で、それとなく寂しげに、言った。



ソレは大きめな機械だった。

純白のボディに深緑のライン、古いタイプの（つまり読んでいるあなたの時代辺りの）洗濯機に似ている形。ウウン……と規則的に震動し、十数個のランプを乱灯させている。

耳障りな程かん高い電子音にも作業員は慣れてしまったらしい。

ソレの下部には三本、太いパイプが繋がられていた。それから無数のコードが地面を蛇の様に這い、覆う。

「ええと、少しヘプタ素濃度は高めです。送信・探知に支障はあり

ません。」

「橋磯さん、所長に伝えて下さい」

「はい。接続開始……」

男性は囁く様に数え始めた。

五、四、三、

二、

一、

零。

その時何が起こったか、直ぐに判断出来た者はいない。例え国立研究所がエリート集団であったとしても。

何故ならソレの置かれた部屋——パルス研究部第三実験場にいた職員は皆、その瞬間にこの世からいなくなってしまったのだから。

同研究部内にいた人はこう語る。

地面に大きな震動が走り、どうしたのかと思ったら壁に亀裂が入った。ガラス類の粉碎する音が断続的に聞こえて、その代わりいつも聞こえていたパルス送信機の稼働音が止まった。

最終的に割れたパイプから漏れたヘプタ素が充満し、第三実験場は爆滅してしまったらしい——。

その後の調べで爆発の原因はヘプタ素爆弾であると判明した。

季里の研究していた新兵器であった。



その少年は頭髪の色が薄い。というか、全体的に色素の薄い人間だ。だから優しげな印象を受ける。

事実、季里は優しい少年だった。

「分かるよユイリン、初めての感覚なんだ」

上擦った声をあげる。

「ボクはもう、恒常的にパルスが送られてないんだ。実に生々しい、生きている——確実に死を迎える感覚なんだよ、これが」

少年は歓喜して、くりくりと瞳を動かす。元よりそういう面立ちの彼は、とても自然に全身で喜んだ。

死こそ人間に近づく為の神聖なる儀式に過ぎないモノ。

そしてその横で、まだあどけない雰囲気を持つ女性は、安心して、抜けている。パルスは確かに少なくなってしまった。

「人間二、なレたのデすね」

喋った途端、下顎が落ちっぱなしになった。持ち上げる。がすんと軋ませはめる。

季里の喜びは彼女の何だろう。

ユイリンが瞳を伏せると、少年は顎を支えてきた。目が合う。

恋人同士の様に、まるでそれが当たり前だという様に、彼等は互いの唇を重ねた。

かばん、と鳴った。

「随分粗く作った人工声帯だね。道理で機械みたいな声だ」

「季里……さま」

「ユイリン」

彼女の幸せは季里の何だろう。

「君はもう、戻るんだ。不比等さんも心配してるだろうし。幸運にも僕等は果てしなく機械に近いけど機械じゃない。だから君は口を割らない——違うかい？」

「いいえ、仰る通りです。貴方はきっと一月も持たない。必ず埋葬させて頂きますわ」

歪んだ喉でユイリンは微笑む。
振れた瞳で季里は見つめる。

「サようなら」

「さよなら」

もうきつと生きて会えないだろう。死んだ後ですら別離しているかも知れない。それは科学に反している以上、どうあっても計り知る事はない。

でも空気の中、芥になったパルスの塵が、擦れる。
違う形で——科学に反せぬあり方で二人は繋がっている、そんな
希望を持った。

二人の遺志はこの国の何だったろう。

↓n e x t

第十一話 爆発に歓声を（後書き）

季里、ユイリン。

あんまりイチャついたら駄目でしょう。

読者が引いてるよ。

第一話から読んで下さっている天使の様な方はお分かりかと思いますが……

日本製は中国製より質がよろしいのです。

アメリカが衰退を始めたこの時代、日本は世界ナンバーワン先進国な訳です。

よって季里の方が人間的な仕様ですね。

ユイリンはさりげに「喉を突いて自殺した」中国人女性の遺体を使って造られた、な設定（ハイ意味皆無だから声帯が人工（中国製だから質が……

お粗末様でした。毎度毎度。

第十二話 紛い物の行方

その感覚の名を、知っているか？
その恍惚に飲まれぬ術はあるか？

答えは、否。



機械達は故も知らず稼動し、小鳥のさえずりにも似た電子音を響かせる。コードが海の様につくなくなった、冷たい床の部屋。

画面は七つ。その内、クリスタル透起——つまり電源の入っているのは二つ。ひとつには収容している奇系児達の発育情報が、もうひとつには日本恒国国立研究所との通信セッションが表示されている。

入鹿は椅子を立ち、未だ茫然と画面に見入る兄の肩を叩いた。数秒して不比等が顔を上げる。

指名手配犯みたいな厳しい顔で、彼は溜め息をついた。乾いた声で吐いた言葉は、一人ごちただけなのか弟に向けられたものなのか、わからない。

「私なりに愛していたよ。何故、何だって、此処を捨てたりしたんだ？」

困惑した右手を額に据えて。
怒り狂う左手を打ち付けた。

「私が何をしたらって言うんだ！」

ディスプレイはただ、震動に巻き込まれて、告げる。

パルスボデイス『P i s c e s p e a c e Ⅱ P p』、ユイリ
ンの失踪を。可能性比率では脱走…誘拐…エネルギー切れが五…二…
三。大気中に微量のパルス検出あり、但し発生源の特定不可……。



杉の木は気持ちが良い位スツと折れた。『一本木な』の例えは多
分、杉以外の頑強な木に違いない。鉄筋をぶら下げていた腕はすっ
かりくたびれていたけれど。

「あー、肩凝るわ全く。でもまあ有難ね」

「別に。で、似たようなものってどういう意味？」

少女は皮肉めいた訊き方をして、肩をぐるぐるしている少年を一
瞥する。骨折れてるんでしょうに、と目で言った。

「ただの獣人じゃなくて、しかも国研が関わったときた。国家機
密っちゅうトコで似たようなもんなのさ」

「成程ね、じゃあ訂正を交えて説明するわ」

「あ、そう？」

形態を猫に変え、羽与は夕葉の膝に乗った。少年は軽く撫でる。

「私の正式名称は『“アニマロイド” 5425型Attnmy式人工生命体』。蔑称は“生命玩具”、つまり動物もどき」

実際、製作者である相楽は彼女を愛玩にし支配していた。

羽与はそれに何か発言する権利もなく、痛みを用いて従わせられてきた。ヒトと見なされない彼女等シンセシスは人権を持たず、動物とも見なされない故に動物愛護の対象にならない。

「だから」

立ち上がり、少し離れて形態を再び人間に。羽与はおずおずと自らのスカートの、包帯代わりに引き裂いてズタズタになった裾を捲る。

雪に浮かぶ芥子の花卉の様に、白い肌にミミズ腫れの古傷が広がっていた。太股全体にまんべんなく、そして服に隠れる様に。勿論これらは相楽が彼女に与えた痛みの名残であり、支配の痕跡である。

「だから私は逃げ出した。外の空気を吸いたくて、私の事を知らない人に逢いたくて、それで」

「僕等は出逢った」

「いいえ、貴方が私を『拾った』の」

作り物の少女は、壊れかけた時計の様に喉を鳴らした。規則的な『不自然』の音はただ、少年を狂わせもせず科学を嗤うでもなく、果てを知らぬと延々続いた。



似たような時間に、男性は立ち尽くしていた。左腕にすぎる女性
は震え、一枚また一枚と葉が散っていく。

秋が近いんだろうな、頭の隅でボンヤリと紅葉を向かえた彼女を
思い浮かべる。

「な、……んですか、これ」

彼の目前に犇めいている——いや、犇めいていた筈のモノ。肉色
で、獣や魚の皮膚を交え、時折血を滲ませて、横たわっていた。

開いた瞳孔が収縮するにつれて鼻から吐気を催す。転がるモノ達
が放つ、肉の腐っていく——微生物が死んだ細胞を壊していく臭い
が満ちつつあった。

「相楽様、これ、まさか……っ」

最後まで発音する前にむせて、思わず眠鷹は膝を折った。スーラ
ンが双葉を広げてそれをかばおうとする。

「何の事はないよ、眠鷹。私から逃げようとしたシンセシス達の亡
骸さ」

老人はおどけた口調で、臭うな、と漏らした。

総勢20は軽く越える人数がずるずると腐敗を進めていく。止め
る術も持たず、破壊されていく。

「ああそうだ、羽与は何処なんだろうねえ？ 私可愛い猫は、あ

の良い仔は」

手近なパッセージで、相楽は屍骸の処分命令を出した。

「あの仔」

腐臭から懸命に身を守る二人を余所に、所長は独り言を始める。

「“不存の化け物”に拐われたんだな、あの仔。可哀想になあ、今頃寒い寒いって、お家帰りたいてって、震えてるだろうに」

どちらかと言えばもうその人はかつての威厳ある天下の国立研究所長ではなかった。不完全に壊れた彼は、がらくたの様に見えた。

季里——神楽は死んだ。

シンセシス達も沢山死んだ。

所員も巻き込まれて死んだ。

羽与はもう戻って来ない。恐らく永遠に。

相楽の寄り処だった者達はそれぞれとても嫌な方法で居なくなっていく。老人は孤独になった。

虚ろな眼で立ち上がって、何処へ行こうとするのだろうか。当てるモノを無くした嗜虐主義者は一体、何に痛みを与えて満足するのだろうか。

その答えは腐臭に紛れ、消えた。

↓
n
e
x
t

第十三話　まるで空を裂く様な、

天が歪む。

雲の切れ間に煌めくのは、誰の怒りだろうか。
海と空の間に灼けるのは、誰の感情だろうか。

膨張し、張り裂け、広がる。



夕葉は大地に掌を押し付ける。そして鼓動に耳を傾けた。僅かではあるが、一瞬でしかなかったが、確かに聞き取る事は出来た。

「ねえ羽与」

砂粒ひとつない土壌を見つめたまま、少年は言う。

「罪って重ねりゃ増えるんかなあ。重ねたって変わらんかな」

少女は答えない。

答えがわからなかったから。否、問掛けの意味がわかったから。

「……駄目」

「どうせ僕には罪がある」

「やめて」

「変わらんよ」

諦めではなくて、逃げたくないだけなのだ。立ち向かう勇氣は兎も角、少年には力がある。

ただその力は、罪深い。

とても罪深くおどましく、それは奇跡というより悪夢に近かった。



彼女は決して戻って来ない筈だと、どうして思っていたのか。
何と愚かだった事か。

ディスプレイの表示する個人コードを見て、息を止めそうになった。

「ユイリン……！」

不比等は弾丸の様に所長室を飛び出した。トランスポートに飛び乗り、一階へ降りる指示を発信する。

鼓動が速くなるのがわかった。

もっと速く降りれば良いのにと、機械に対して焦りを覚える。理智的に考えるよりも子供の様な焦燥が勝った。

「兄さん？ 何を慌てて」

二階にいた入鹿の声が追った。それでも振り向かず、返事をする事もない。

ようやく着いた一階の廊下を無我夢中で突っ走った。

ロック解除。自動開閉システム作動。

緊急避難用の扉の先に、彼女は横たわっていた。

「ユイリン」

呼び掛けると薄く眼を開いた。しかし返答はしない——口を開いてはいたが、喉が動かない様だった。

おかしい。パルスが殆んど残っていない。

ユイリンの仕様ならば、どんな劣悪な環境でも三〜四ヶ月は持つ筈だ。この劣悪とは、水中（深海等の高水圧も含む）や砂漠、熱帯林といった本当に厳しい環境を指す。つまり飲食が必要ない体なので、持久性は高い。

しかし国立研究所で行方不明になってからまだ一ヶ月も経っていない。なのにパルスがここまで減っているのはおかしい。しかも外傷もない分、その消費は高くない筈なのに。

「何をそんなに」

考えられるのは、精神的な疲労。

ロボットとは違う——感情や意思といった精神面に損害があったならば。

「そんな、思い詰める様な……」

不比等はユイリンを抱き締めた。早くパルスを充填しなければな

らない、一刻も早く。

「兄さん……」

「入鹿、充填ポッドを作動させろ！ 早く、枯渴したら脳が壊れる！」

いつの間にか背後にいた入鹿に一喝し、力ない体を抱き上げる。脳が壊れてしまうとメモリーや人格が消滅するおそれがあった。最悪、身体が腐る。

充填ポッドは五階だった。



コンバットウイング二機。特別硬化装甲、それに名称のよくわからない装備が幾つも収納してある。明らかに自衛軍の使う様なタイプではなかった。

闘う翼、その名の通りに殺戮を主とした機械なのだろう。

ボディに青く印されたロゴに見覚えがあった。

日の丸に丸底フラスコを組ませた、日本恒国国立研究所の印だ。

『保護対象、並び殲滅対象発見』

片方のボディには国研の以外に、別なロゴがある。

羽与はそれを見て絶句した。

「マスター……」

何故、わざわざ所長が出向いてくるのだろう。第一『坊ちゃん』の件はどうしたのだ。

また捕まってしまったら、それより夕葉が力を使ってしまったら。

「所長さん？ あーあ、予定通りじゃん」

状況はいつかと似ている。

郊外の公園、空と地での睨み合い——あの時の飛翔艇は収容所の追手だったけれど。

「……そんなに死にたいんだ？」

言葉にし難い感情に震える羽与の耳元で、悪夢は嗤った。風が止んだ。

『脱走物、捕獲シマス』

「やめっ——」

首筋がざわついた。

「支配領域拡大。上底捕縛。下底解放」

少年は両の腕を広げた。まるでそれが翼であるように。言葉を続ける。

「圏内の下底における第一特定人格を『猫』と仮定。『猫』を削除」

途端に羽与の首筋からざわつきがなくなった。圧迫感がそれと同時に消えて、初めてあった事を知る。

見えない壁にぶつかるような。

羽与は何かに吹き飛ばされ、公園の隅に落下した。

「っは……」

「氾濫防止の為、下底捕縛。支配領域、上底中心に絞って縮小。…
…停止」

「夕、葉」

消えそうな少女の声はもう届かない。穏和な夕葉が別人に見えた。
その表情は笑っている様にすら思える。

「支配領域確定。——獲得個体数換算終了」

言葉が終わると同時に、がくりと飛翔艇が揺れた。しかしそれから動く事はなかった。

空気が張り詰めた様にしんとして、動こうとすれば肌がピリピリと痺れる気がした。

↓next story.

第十三話　まるで空を裂く様な、（後書き）

次回、少々乱暴な表現を含む予定です。

御閲覧有難う御座いました。

感想など下さると嬉しいです。

第十四話 道化師の結末

その時間は、永遠の様に。
その生命は、人形の様に。

決して解放される事のない――

「どうやって死にたい？」

少年は問う。しかし答える者はいない様に見えた。
空に止まる飛翔艇の、幾つかのプロペラ部分は全て静かに停止している。エンジン音も聞こえない。

けれど墜ちる事がないのは、それが夕葉の支配圏内に『在る』からである。上下底は捕縛され幾つかの個体は飛翔艇ごしに縛られて。

「……これ邪魔だね。捨てまい」

飛翔艇はしんとしている。

「圏内の非人格を『翼』と仮定。『翼』を廃棄」

ききき、と軋む様な音がした。飛翔艇――コンバットウイング二機が震動し、やがて何処かが弾け、小さい炎がたつ。大きな手に掴まれた様に、飛翔艇は損壊を始めた。卵が割れる姿に似せて、下部がメリメリと裂けていく。

それぞれから吐き出される様に、五・六人が墜ちた。

コンバットウイングは羽与と反対側の隅に吹き飛び、着地と同時に爆発した。熱気が肌に迫る。墜落した翼は天高く炎をあげ、燃焼していった。

「ねえ、どうやって死にたいだん」

少年の瞳には歓びが浮かんでいた。殺戮への快感が、そこから滲み出ていた。

「ほいじゃあ勝手にやるでね」

地面に固まっている人間達——国立研究所の職員等と所長は、何か答える様子はない。死を直感して怯えていたのかも知れない。そんな彼等を見捨て少年は続けた。

「圏内の第二人格を『犬』と仮定。『犬』、浮上」

「……あ、あ、あ」

一人、ゆっくりと持ち上がる。四肢をばたつかせる様は魚に似ていた。

「……『犬』の脳を軋轢」

浮いたまま、犬と呼ばれた彼の頭が潰れた。叫ぶ間も与えられず、その代わりに痛みもなかっただろう。野菜を踏みつけた様な他愛もない音であった。

一方で、頭上から血を浴びて人間達は騒ぎ出した。言葉にならない叫びをあげ、暴れて、見えぬ束縛から逃れようと。

少年はそれを、醜いと思った。



赤いものが眼に映って、少女は吐気を催した。
けれど罰当たりにもそれは人が殺されたからではなく。

夕葉が人を殺したから、喜々として殺ったから、少女には辛かったのだ。

別な人だ。羽与はそう思った。あんなの違う。

決して長く共にいた訳ではないけれど、あれは夕葉じゃない。

力を使うのを、嫌がっていた。疲れるなどと言っていたが、本当はこういう事だったのではないか。夕葉は抑制しなかったのかも知れない——殺す事に歓びを覚える彼自身を。

向こうでは三人、新たに屠られた。一人は体をねじ切られ、一人は体を二つに割られ、もう一人は全身をミンチにされて。全で一瞬で終わった。皆、痛みは一切与えられていなかった。

「矛盾、してる……」

羽与は独りごちていた。



少年は黙ったままその老人を眺めていた。とは言えまだ初老であるが。両者は互いに沈黙を保ったままだ。

初老の男性——こともあろうに日本恒国国立研究所長はふと、視線を公園の隅に流した。うずくまっている少女を認めて安堵を浮かべる。

「返してくれ」

不意に漏れた言葉は懇願とは僅かに異なる。

「あれは……あの仔は獣人とは違うのだよ。君と同じ様に、いや、場合によっては君以上に『存在すべきでない』存在なのだ」

「それくらいの予想はついとる」

言葉の鍵を不要とするだけで隠される筈はない。彼女には彼女なりの理由があって存在するのだろう。そして夕葉の様な自然の産んだ『不自然』とは違い、ヒトという色んな意味で身の程知らずな生物によって造られた『二次生物』なのだから。

どういう欲望があってこの所長が造ったのかは知らないが、当人が存在すべきでないと言いつつ切ったのだから、それなりの——力というか、いわれがあるのだ。

「羽与は自分の意志で動いた。そこに僕やアンタが介入する事は出来ん」

「しかし……」

「残念だけど、支配領域は固定された。もうアンタは出られんし、羽与が入る事も」

「わ、私にではない。国研に返して欲しいのだ！……このまま季里の様にしたくはない。羽与は知っているだろう、ヘプタ素で新しい型の爆源を造っていた……あれでパルス送信機を爆破して、今頃は何処かで自壊している……！」

混乱の余り、彼は多くを口走っていた。その様子に羽与が絶句しているのを見て、夕葉は溜め息をついた。

「駄目だわ。アンタ、自分の非を全然わかつとらん。結局自分の為にだらあ？　そうやって尻拭いする為に羽与を連れ戻したいだらあ。アンタが造った原点での罪を、原罪として羽与に課すつもりで」

「な、な、な……」

「圏内の最終人格を『ピエロ』と仮定。『ピエロ』――」

少年は額に手を置いた。

「消滅」



少女の眼には、ずっと『マスター』と呼んできた彼が、いなくなった様に見えた。陽炎の揺らめきに潤んで、溶けて逝った――……

そして次の瞬間には、夕葉がその場に崩れ落ちるのが、はっきりと映った。

支配領域は決壊した。

↓ next story

第十四話 道化師の結末（後書き）

これまでに有難う御座いました。
後すこし、頑張ります。

つきみちよろ。

最終話 束の間の夢

日本は大騒ぎになっていた。

都内の公園で五人の惨殺体が発見され、更には大破した飛翔艇が二機も発見されたのだ。しかも飛翔艇はどちらも国研所有のもので、片方は所長機であった。しかし所長は未だ行方が知れず遺体も見付かっていない。

そして国研では、今まで法で禁忌とされていたパルス式人間が制作された事が発覚し、国民への説明で所員一同四苦八苦していた。市民団体から抗議や苦情が殺到しているらしい。



川の音が聞こえる。森の匂いがする。

都会の喧騒はない。

酷く寒いけれど、何故かとても温かくて肌触りが良かった。全身がズキズキ痛くて動けない。起きたいと思っても、重い瞼と疲れた身体がそれを許さなかった。

うつすらと、渾身の力を込めて瞼をこじ開ける。

「……あ」

大量の枯れ葉。

彼の全身を覆う様に、これでもかと積まれていた。中には苔や枝が混ざっている。加えて茶に変色した布片、ゴミ捨て場にありそうな穴だらけの毛布。

濡れない様にと洞穴に、夕葉は一人横たわっていた。

(……馬鹿だ、僕)

動けないのが忌々しかった。自分の行為が苛立たしかった。愚かな事をしていたと、改めて自分を恥じる。

どうして歯止めがきかないんだろう、と。



意識を取り戻した彼女は、そこが見慣れた風景と知って、些か残念に思った。そして前方に立つ人影を見て、ふと首を傾げた。

「……入鹿様？」

てっきり不比等だと思っていた。ユイリンの問いに答えるように人影が揺れる。

「兄さんは国研に行っている。具合はどうだ？」

「特に障りはありません。……御迷惑をおかけしました」

「それは兄さんに言え」

入鹿はぶっきらぼうに言う。と部屋を出た。それに従ってユイリンも立ち、耳の熱を指で拭いながらドアを開く。

束の間の夢のよう、そんな事を思った。



「――大丈夫？」

声を聞いて初めて傍らの獣に気付く。柔く触れてくる肉球と猫の毛がくすぐったい。少し濡れている。

「寒いよね？また毛布探してきたげる」

雪が止んだらね、とつけ加えた。羽与も毛皮の上にボロ片をはおっている。

そうして何度も夕葉の頬を撫でた。

「羽、与」

喉が張り付いて酷く喋り辛い。

「お腹空いてるでしょ。野生動物を狩るのは規制が厳しいけど、この際知ったこっちゃないわね」

引きずり出されたのは猪だった。まだ死んでから余り日が経っていない様に見える。

「火起こしは起き上がれる様になってから」

雪をひと掬い、夕葉に含ませる。いたわる様な口ぶりで羽与は続

けた。

「疲れるどころか死にかけるだなんて話が違うわよ。無茶ばかり」

「……羽与」

「わかってるから。泣かないの」

頬を伝っていた滴を丹念に舐めとって、減った水分の為に雪をまた含ませる。

飲み込んで夕葉は僅かに首を振った。否定型だった。

「——ち、がう。わかつとらんのは、僕の方だわ。殺す権利なん、責める資格なん、ない……」

「仕方のない事よ」

「でも僕は殺した！……罪を裁く権利も資格もない癖に、自分の事は棚に上げて。挙げ句にそんな自分を正当化して、さも正義みたいに振る舞って、罪のない人間すら殺したんだ」

「けどもう戻れない。貴方も私も生まれ直す訳にはいかないの——貴方は殊更に」

その時、この無慈悲な世界は何と言うのだろう。どんな言葉で拒絶するのだろう。

何の為に不自然が在る。

「責めるなどと言わないわ。だって貴方は国にとって重要な人物を殺したんだもの。でも……少なくとも私は納得してる」

「そんな」

「もう眠って。動けもしないんだから」

冷たい夜がやって来る。

乾いた風が大地を撫でる。

二人はそうして、世捨てのような生活を始める。もう二度と表には出るまいと。

勿論そう簡単に行く訳もないのであったが……。

ひとまず此処で物語は幕を閉じた。

F i n .

最終話 束の間の夢（後書き）

今までありがとうございました。

まだString Loopは続きますので、続編もどうぞよろしくお願いします。

因みに主人公は夕葉ではありません。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8623a/>

String-Loop.

2011年4月30日18時19分発行